

日本産ヒョウモンチョウ類は、総じて翅表の模様がよく似ていて、初心者にとってその種名同定がやさしくない族である。このオオウラギンスジヒョウモンもウラギンスジヒョウモンときわめてよく似ており、その大きさも種名どおりに”大型のウラギンスジヒョウモン“とはいきれない個体もいて、必ずしも種名判別の切り札とはならない。白水博士の標準図鑑（2006）には北海道、本州、四国、九州に分布、寒冷地に多く、暖地では一般に少なく山地性のものである、と記述されている。

筆者の本種との出会いは、1973年8月、妻と2才半の息子、それに9か月の娘を背負子利用で背中にかついだ家族旅行の際に、路線バスを利用して足をのぼした妙高笹ヶ峰高原だ。標本箱

に当時の正確な記録ラベルのついた♂個体の標本があるので間違いないが、悲しいかな出会いの瞬間など何一つ当時の記憶はない。草原に腰をおろして昼食をとっている最中、風に流されるように小さなシジミチョウが飛んできて急ぎネットを振ると



Aug. 9, 1973 妙高笹ヶ峰
leg. M. Shimazaki



裏面

ウラゴマダラシジミだったことだけは妙にはっきり覚えている。決してそのリベンジというわけではないのだが、ちょうど20年後の1993年8月、今度はマイカー：HONDA インスパイアー利用で新潟佐渡が島を訪れたついでに笹ヶ峰高原を訪れている。ゴンタとチイコというネコを同伴して



建物の壁面にもヒョウモン類がたくさんいた

の家族旅行で、このときは草原内にある休憩所の壁に数種のヒョウモン類がミネラル補給を目的としてだと思われる群れをなして集っており、じっくりと種名を判別しながらネットインを計ったわけで、オオウラギンスジヒョウモンは♀だけを見た。ミドリヒョウモンが壁面に向かって頻度高くまとわりつくような飛翔をみせるなか、ウラギンヒョウモンを主

とする多くの個体は、湿っぽい土壁に並んで盛んにストローを動かしていた。草原に咲くノアザミやヒヨドリバナ周辺にも元気よく飛び交うウラギンヒョウモン、ギンボシヒョウモン、ウラギンスジヒョウモンなどがみられ、壁際にへばりつく個体群は花蜜へと飛ぶ気配はみせなかった。このとき関心をもって熱心に探索したのがミヤマシジミだが、牛が放牧された周辺のクローバー花上にみられたのはヒメシジミだけ。

ごく最近では、2013年7月14日にウスイロヒョウモンモドキ観察会で訪れた兵庫県養父市ハチ高原で、オカトラノオの花蜜を求める複数の本種を観察している。

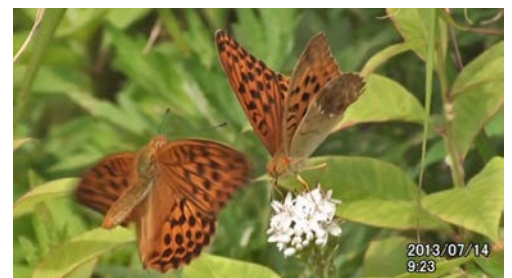


Aug. 2, 1993 妙高笹ヶ峰
leg. M. Shimazaki



♀

裏面



2013/07/14
9:23